すが、今のカリキュラムや指導体制が、「取り残し」を作っているような矛盾さえ感じています。

教育にお金がかけられない理由は「お金がないから」であり、「お金がないから先生は増やせません」と言われてしまうと現場としてはお手上げです。ICT化や現場の工夫だけでは乗り越えられない現状なのではないかと感じています。

「教材研究と学級づくり」が基本

平山裕人（北海道・元小学校教員）

私の住んでいる北海道では、定年延長を拒否した人が、該当者の約25%にのぼります。4分の1の人が、もういいです、という判断をされているんですね。定年前退職者の数も多くなっています。

かつて、教員がやる仕事の大きなものは、教材研究と学級づくりでした。でも、今はそれが失われてしまっているのではないかと感じています。

私自身は6年前に定年退職した後、延べ30人くらいの子どもが通ってくる塾をやるようになりました。それで教えてみると、小1で学ぶ繰り上がりの計算や、小2の九九がわからなかったりする。かつては、これを抜かしたら絶対だめだと言われていた計算や九九ですね、そういうものがなおざりになっているなと感じました。

私の塾に来ている小学6年生の例なんですが、「今日学校で習ったことがわからなかった」と言うんです。なので、その日のノートを見せてもらいました。

そうすると、とても綺麗に課題がノートに糊付けされていて、黒板に書かれていたことがビシッと書いてあって、色鉛筆も使われていて、1ページにおさまっていて、まるで参考書のようでした。でも、そんな綺麗なノートを作っているのに、内容が「わからなかった」って言うんです。

私は、塾に来ている子どもには、「わかるように教えるけれど、わかったふりだけは絶対しないでよ」と言っています。ノートはとろうがとるまいが自由、わかればいいんだよ、って。それで、その子のノートを見ながら、問題文をちょっと変えて説明したら、数分で「わかった」となりました。

今は、「学年×10分+10分の時間、家庭学習をすること」とか、ノートと板書の一体化とか、学力テストのための勉強だとか、形ばかりが大事にされます。形ばかりを子どもに押し付けて、一番大事な「わかった」という実感を引き出せていないのではないかと思います。

教員は教材研究と学級づくりに時間をとって「わかった」を引き出し、子どもの話をじっくり聞く。それ以外は必要ないんじゃないでしょうか。本来の公教育とは何なのか、余計なことを取り除いて、シンプルに戻していくことが必要だろうと思います。

現場で判断していくことの大切さ

大森直樹

研究者が学習指導要領の分析をするとなると、そこに書かれた内容の部分的なことを研究してしまうんですよね。でも、学習指導要領に基づいて教科書が作られて、評価基準が作られて、時数があって、それらが全部学校に下りてきて、子どもたちに影響を与えるわけです。

今みなさんがお話されたのはそういうことなのであって、研究者も、指導要領そのものだけを分析する形ではなくて、全体をみるように変えないといけないなと思いました。

それから、じゃあ教育課程基準が変わればバラ色の未来になるかというと、そういうことでもないんです。国が決めているものですから、どうしたって現場はそれに応じることが求められます。そうすると、一日何時間の授業があって内容はこうで、っていうことの大枠が決められてしまっているので、それをどうするのが一番良いのかということを考えなくなってしまうんですよ。

でも、学習指導要領のどこが問題で、自分たちで判断すると何時間くらいがちょうどよくて、どのくらいの内容量がベストなのか、という批評をしていくことが必要だと思うんです。基準は決まっているけれど、現場の自分たちの判断ではこの方がいいと思います、ということですね。そういう判断を積み重ねていって、基準の作成に影響力を与えていけるよう、現場のみなさんと一緒にやっていきたいと改めて思っています。